

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 199号

平成30年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

カウマン夫人著『日の出に向かって』より (11)

11月1日

川のかたわら、その岸のかなたこなたに、食物となる各種の木が育つ。その葉は枯れず、その実は絶えず、月ごとに新しい実がなる。これはその水が聖書から流れ出るからである。その実は食用に供せられ、その葉は薬となる。(エゼキエル 47・12)

教会史や一般の歴史のページは、60歳を超えた人々が成し遂げた功績で埋められています。

聖書の言う「われわれはみな木の葉のように枯れ」(イザヤ 64・6) というのは、一面の真理を物語っているでしょう。しかし木の葉が色あせるということにおいては、何と多くの違いがあることでしょう。

ある木の葉は、はんの木やくるみの葉のように、枯れて茶褐色となるものもあり、またあるものは、白樺や風に揺れるはこやなぎの葉のように、みごとな金色となるものもあり、そしてあるものは、赤い檜木やかえでの葉のように、真紅や黄色の鮮やかな色を身にお

びるものもあります。

もし人が、少しでも自然に対して愛の心を持っているなら、王冠をいただいた丘や、色あせる木の葉の栄光と輝きを一目見ようと、時間をさいてでも出向いていくのではないのでしょうか。

ある木は秋に、春の芽吹き頃と同じ色の葉を再びつけるといわれますが、そうではありません。秋にはさらに深く、更に生き生きとした色になるのです。

それが悪夢であるのか、あるいは黄金色に輝く夕暮れであるのかを決めるのは、その人の霊のあり方である。

11月4日

死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解放するためである。(ヘブル2・15)

「兄弟たちよ、さようなら。私にとって最も素晴らしいことは、神はなおも生きておられる、ということです。兄弟たちよ、さようなら」。そう、ジョン・ウェスレーは言いました。

彼は、いくさ車に乗りこみ、座についたのでした。これがクリスチャンの生き方です。一方、ムーディーがこの世を去る時、彼は妻にこう言い残しました。「ホラ、歌が聞こえるだろう」。そしてまた、「地球は遠ざかり、天が開かれつつあるのだ」と言って、ついに息を引き取ったのです。

なんと美しいことでしょう。これがクリスチャンの歩むべき道なのです。そしてこれこそ、死の瞬間における栄光の姿なのです。それでもなお、私たちは死を恐れて、愚かに生きようというのですか。

山間のせせらぎが歌いつつ

岩を越え、荒野を突き進むように

私を、純潔で幸福なあなたの子として

あなたに向かって、うたいつつ進ませてください

## 11月5日

あの時には、彼のともしびが私の頭の上に輝き、彼の光によって私は暗闇を歩んだ。(ヨブ 29・3)

神の下さる太陽の光同様、人生における灰色の日々のゆえにも、神に感謝しましょう。……

忍耐や勇気、非利己性などの思いがけない意外な面を発見するのは、たいてい私たちが雲行きが悪い灰色の日々にある時です。その時、私たちは、メッキで覆われた幸運の陰に、力と美しさがあったことを発見するのです。そしてそれは、…以前には見られなかった人柄の価値が、今明らかにされたのだということがわかるのです。

灰色の日々のゆえに、神に感謝しましょう。よく言われるように、それが、単に私たちがより深く太陽のありがたみを知るようになるからというわけではありません。それは輝く光の荘厳さの中で太陽があらわすものと同様のすばらしさ、快活さ、そして感激させるような魅力の領域が、灰色の日々の中に存在するからなのです。

1年の内には6月という月もあれば、12月という月もあるように

冬には雪の堆積があり、5月には花が咲くように

夏には太陽の光があり、11月には霧が出るように

明るさが訪れる夜明け前の1時間は、最も暗い時期なのです

11月11日

彼が正義に勝ちを得させる時まで、いためられた葦を折ることがなく、煙っている燈心を消すこともない。(マタイ 12・20)

オースチン・フィルプスは、自分がもはやクリスチャンの奉仕活動に積極的に携われないことを知った時、次のように書きました。

「もう使い物にならない細い支流のような私だけど、この晩年の私の心に、一つの新しい意味があることを確信させられています。人が、他には何もできなくなる時、彼は、神の王座に絶えず注ぎこまれるとりなしの祈りという大河に、彼自身の小さな支流をつなぐことができます。その河は、ちょうど大洋がしずくの集まりによって成り立っているように、いくつもの支流から成り立っています。祈る人は、決して使いものにならない人ではありえないのです。」

私を役に立たせてください、私の神よ

忘れられたものにしないでください…

すべての者は、ここであなたに仕えるのです

大きいものも小さいものも、すべての被造物はみな

私を役に立たせてください、私の神よ

すべての者の中で、最も卑しいものなのですが

ホラチウス・ボナール

11月13日

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。(Iペテロ2・9)

教会学校の先生が、いつだか小さな女の子にこんな質問をしました。「ねえ、聖徒と言われる人は、どんな人だと思う」。

即座にその子供の思いは、昔、彼女が両親と一緒に大聖堂を訪れた時のことに向けられました。窓はステンドグラスで装飾されており、そこには、古い時代の貴族たちが生きていた頃、神や人に仕えて苦しめられ、そして死んでいった人々の様子が、見事に描かれています。

夏の陽光が、ステンドグラスのあでやかな色を、会堂のくすんだ置き物の上に映し出していました。その美しい光景が、いつまでも残る印象として、その子供の心に止まり、彼女は今、そのことを思い出して、こう答えたのです。「聖徒っていうのは、天国の光で輝いている人のことでしょう」と。「聖徒らしさ」という言葉の定義について、これ程までに見事に言い切った神学者が、今までにひとりでもあったでしょうか。

11月16日

父よ、これはまことに、みこころにかなった事でした。

(ルカ 10・21)

身体的障害者は、時に祝福であるとさえ言えます。エジソンは、彼の聴力を、手術によって直すこともできなかったわけではありません。しかしながら、彼はそれを拒んで言いました。「耳が聞こえないということが、私を騒音と無意味なものから解放し、研究にさらに没頭できるようにしてくれた」と。心理学者であるアルフレッド・アドラーが主張するところによると、「文明」といわれるもののほとんどすべては、劣等感を克服しようとした努力の結果であるということです。そして、その劣等感とは、しばしば肉体的弱さによって引き起こされるのだそうです。

主が、私から体の能力の一つのお取りになった時が、同時に、別の能力を与えて下さった時でした。それは神が可能として下さったのです。私はまた、美しいイタリアの格言に思いを寄せます。「神が扉を閉められるとき、彼は同時に窓を開けられる」。ヘレン・ケラー

11月19日

だれでも、キリストについている者だということで、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よく言うておくが、決してその報いからもれることはないであろう。(マルコ9・41)

フランシス・リッドレイ・ハーバガルという人の詩は、…彼は小さなことに働く力について、こう書いています。

ずっと昔、親切に語られた言葉の思い出が

枯れゆく花の香りのように

甘くかおるのです

あたたかな手の感触

励ましのひと言葉

聖書の一句が記された一枚の紙片

私たちは、そんな取るに足りないものを

普通、伝道の業とは呼びません

しかし心が疲れ切っている人には

ああ、私たちは気づかずとも、

そんな小さなことがらが

良き結果をもたらす力となるのです

ひとりの魂の幸福に役立つものを

とるに足りない小さなことだと言うことはできません

## 11月23日

あなたがわたしの心にお与えになった喜びは、穀物と、ぶどう酒の豊かな時の喜びにまさるものでした。(詩篇4・7)

たとえば毎日の生活が灰色に曇っているとしても、すべて美しいと思われることに、あなたの信仰を置くようにしましょう。太陽が隠れていても、太陽はなくなっておりません。冬が支配する時も、春はやって来るのです。ですから明るさも温かさも、やがて戻ってくる時が必ずあることを信じて、待つ勇気を持つようではありませんか。収穫のために、あなたの土地を耕す勇気を持つようではありませんか。

私は、地球が灰色などでなく バラ色であることを知っています

そして、天国は不気味なところではなく

晴れ晴れとしたところであることを知っています

私はかがむと 花がつめます

私は立って天を仰ぐと

青々とした空が見えます

ロバート・ブラウニング

灰色がかった曇り空が、私の魂にある太陽の光を、暗黒にしてしまうことはない。又嵐が、私の心の中にある喜びを、水浸しにしてしまうこともない。

11月27日

神は、いかなる患難の中にもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さいのである。(コリントⅡ1・4)

彼女もまた、とても苦しんでいる人でした。そして、日々痛ましい病気と苦闘していました。しかし、私の家の門のそばのたくましいポプラの木のように、彼女は苦しい呼吸をしながらも、渾身の力をふりしぼって、彼女の上に襲いかかる残酷な病気を打ち負かしてしまっただけです。そしてその結果、彼女自身の性格は、とても強くなっただけになり、また美しくなっただけです。そして、励みや助けを必要としていたすべての人々を、彼女はいつも喜んで迎え入れるようになったのです。

神は、私たちがただ快適にするだけの慰め方はされない。しかし、私たちが慰め手にして下さい。

11月30日

もし、あなたのからだ全体が明るくて、暗い部分が少しもなければ、ちょうど、あかりが輝いてあなたを照らすときのように、全身が明るくなるであろう。(ルカ 11・36)

あなたは、ちょうど

神の古いろろうそくが燃え尽きようとしているのに似ている

あなたは燃えなければならない

不平を言ってはならない

神がよしとされる時に、その炎の吹き消されるまでは

私たちは皆、神のろうそくなのだ

何本かは、少しの間燃えて、消えてしまう。

他のものは、もっと長く燃えるかもしれない

そして、あるものは、最後まで燃え尽きる

あなたは、そのうちの一本なのだ

神はその理由をご存知だ

しかし、私はこう思う

神のために、最も大切なものまでも

与えることをいとわない者こそ

神が最も愛されるものであって

神はそれらの人たちの燃え尽きるまで、生かされるのだ

しかし、とにかく

あなたは、ちょうど、神の古いろうそくが

燃え尽きようとしているのに似ている

あなたは燃えなければならない

不平を言うてはならない

神がよしとされる時に、その炎の吹き消されるまでは

古いろうそくを燃えさせなさい

なぜなら、その光は暗闇の中にいる者に道を示すことができるか

らだ

私たちは、次のことを悟らなければなりません。私たちの霊的な  
ろうそくの輝きが持続するためには、ただ灯心が、神の恵みの中に  
深く根ざしている時に限るのだということを、知ることのできる賢  
さがなければならないということ。